

エーリッヒ・ケストナー作『僕が子供だったころ』抄訳 - 1 前書き

『わたしが子どもだったころ』（高橋健二訳 ケストナー文学全集 第7巻 岩波書店 初版 1962年。34刷 2000年）を下敷きにして、理解しにくいところを修正したものです。朗読するために、省略した箇所もあります。ページ番号は、岩波版の該当箇所を示しています。ドイツ語は、”Kästner für Kinder” Atrium Verlag 2004年版を参照しました。 岡部由紀子

1. (11頁～)

ぼくが子どものころは、今とはずいぶんいろいろなことが違っていた！ぼくは鉄道馬車に乗ったことがある。車両はもう軌道を走っていたが、馬に引かれていた。車掌は御者を兼ねていて、むちを鳴らした。しばらくして、人々が電気で動く車両に慣れた頃、婦人たちの間で、長くて裾が細くすぼまったスカートがはやった。そのため小股でしか歩けなかったし、市電に乗り込むことなど不可能だった。彼女たちは、乗客のどっと笑う中を、車掌や他のたくましい男たちによって、市電へと押し上げられた。おまけにその時、頭を斜めにしなければならなかった。車の輪のように大きな帽子をかぶっていたからだ。

2. (12頁～)

その当時はまだドイツ皇帝がいた。皇帝は高くはねあがった口ひげをはやしていた。ベルリンの宮廷理髪師は、皇帝ご愛用の口ひげバンドの広告を新聞や雑誌に出した。それでドイツの男たちは、毎朝顔をそった後、幅の広い口ひげバンドをマスクのようにつけ、間抜けな顔をして、半時間は口がきけなかった。

ザクセンの国王もいた。皇帝のためには毎年皇帝演習が行われ、国王のためには、誕生日を祝うパレードが行われた。擲弾兵や狙撃兵の制服、とりわけ騎兵連隊の制服は、はなばなしくきれいだった。ドレスデンのアラウン広場で、騎馬軍団が馬上高く、サーベルを抜き、槍を立てて、国王の棧敷の前を走りすぎると、観衆は感動して、みんな万歳と叫んだ。ラッパが高らかに鳴り響き、鈴のついた旗竿が鳴り、鼓手が打つティムパニーがとどろいた。この閲兵式は、ぼくが一生の間に見た一番きらびやかで高価なレビューであり、オペレッタであった。

3. (14頁～)

国王の誕生日はこのように、派手ににぎやかに祝われた。その名はフリードリヒ・アウグスト三世、ザクセンの最後の王となった。もちろんその頃はまだ、自分が最後の王になろうとは、彼は知るよしもなかった。ときおり王様は子供たちを連れて、馬車で街を走った。幌をはずした馬車の中から、小さな王子や王女たちが、僕たち子供に向かって手を振った。王様も手を振りほほえんだ。僕たちはそれに応えて手を振りながら、王様を少し気の毒に思った。僕たちばかりでなく世界中の人が、王様の奥さん、つまりザクセン王妃が逃げたこと、子供のフランス語の家庭教師のベルギー人と駆け落ちしたことを知っていたからである。それで、王様は笑いものになり、王女と王子たちは母親を失った。

クリスマスがやってくるころ、王様はときおり一人きりで、ほかの将校たちのようにマントの襟を高く立てて、タベの灯りがきらめくプラハ通りを散歩した。ぽっと明るいショーウインドウの前に、物思いに沈んで佇んでいた。王様は子ども服やおもちゃに一番心をひかれた。雪が降っていた。店の中ではクリスマスツリーがきらめいていた。通行人はつつきあって、「王様だよ！」とささやいたが、邪魔をしないように急いで通り過ぎた。王様は孤独だった。彼は子供たちをかわいがっていた。それで、人々も王様を愛した。

もし王様がラーリッシュ肉屋に入って、売り子の一人に「熱いソーセージを二本、たっぷり辛子をつけて、すぐ食べられるように！」といったとしたら、きっと売り子は膝を曲げてお辞儀などはせず、また「光栄に存じます、陛下！」などとは答えないで、ただ「パンを添えますか、それともいりませんか。」と聞いただろう。そこに居合わせた他の者は、母や僕であっても、王様の食欲を損ねないために、そっと目をそらしていただろう。だが、王様には、そうするだけの勇氣はなかった。

ラーリッシュ肉屋には立ち寄らず、ゼー通りに入り、レーマン・アンド・ライクセンリングという洒落た食料品店の前で立ち止まり、アルトマルクト広場を通り抜け、王城通りをぶらぶらとくんだり、ツォイナーおもちゃ屋のショーウィンドウに飾られている、戦闘隊形に並んだニュルンベルク製の錫でできた兵隊をじっと眺めた。それで王様のクリスマス散歩もお終いとなった。往来の反対側はお城だったからだ。王様だということが分かり、番兵が飛び出してきた。号令が響いた。ささげ銃が行われた。ザクセンの最後の王様は帽子に手をあてがいながら、あまりに大きすぎる住まいの中に姿を消した。

4. (16 頁～)

半世紀は長い時間だ。だが、昨日のことだった、と思うこともよくある。あれから実にいろいろなことがあった！戦争があり、電気の照明がついた。革命とインフレ、飛行船と国際連盟、くさび形文字の解読と、音速より速い飛行機！だが、季節の移り変わりや宿題はいつもなくならなかった。今でもそれは変わらない。母はまだ、両親に丁寧語で話しかけねばならなかった。しかし、両親と子どもたちとの愛情は今と変わらない。父の時代は学校で昔風のつづりを習った。たいていのものは変わってしまったが、ほとんどのものは元通りであるともいえる。

ぼくが算数の宿題を、煤けた石油ランプの下でやったのは、つい昨日のことだったか、それともほんとに半世紀前のことだったか。突然、ピシッと音がしてガラスのホヤが割れたのは？用心深く鍋つかみでホヤを持って、取り替えねばならなかったのは？今ではヒューズが切れると、マッチで新しいヒューズを探して、はめ込まなければならない。その違いはそんなに大きいのか。そりゃ、灯りは今あそこよりは明るく光る。電流を灯油缶で買う必要はない。いろんなものが、前より便利になった。それで前より良くなったか、わたしには分からない。そうかもしれないし、そうではないのかもしれない。

5. (17 頁～)

ぼくは、子どもだったころ、朝、学校に行く前、近所の消費者組合の店に走っていった。「灯油を1リットル半、並の焼きたて4ポンドパン(2キロ)を一つ。」とぼくは売り子にいった。それから、小銭と、割引券と、パンと、ポシャポシャと音を立てる灯油缶を持って、先へ走った。瞬くガス灯の前で降る雪が踊っていた。寒気が鋭い針で縫いつけるように、ぼくの鼻の穴を詰まらせた。次に行ったのは肉屋のキースリング親方のところ。「くださいな、自家製の血入りのソーセージとレバー入りのソーセージを半々ずつ、あわせて125グラム！」続いて八百屋のクレッチェおばさんのところへ。「バターをひと塊と、ジャガイモを3キロ。お母さんがよろしくって。この間もらったジャガイモは凍っていたそうだよ。」…

それから家へ！息がエルベ川の蒸気船の煙のように白く口から出た。わきの下の暖かいパンがずるずるとずれ、ポケットの中ではお金がチャリンチャリン音を立て、缶の中では灯油が揺れる。ジャガイモを入れた網は、膝にぶつかった。アパートの入り口の扉がギーといった。階段は一度に3段またいで登った。4階のベルだ。だが、ベルを鳴らす手が空いていない。靴でドアをけとばす。戸が開く。「お前、ベルを鳴らせないの？」「お母さん、いったいどうやって鳴らせばいいの？」お母さんは笑う。「買い忘れた物はない？」「そんなわけないよ！」「どうぞ、こちらへいらしてください、お兄さん！」それから、台所のテーブルで、カールスバートのイチジクのシロップ入りの麦芽コーヒーを飲み、買い立てのバターを塗った暖かいパンの端を食べた。本を入れたランドセルは廊下に立って、じれったそうに足踏みしていた。